第２８号　2015 年８月 15 日

仙台教区　復興支援活動ニュースレター

４→６・４５通信

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371　FAX 022-222-7378
義援金振替口座：０２２６０－９－２３０５
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

仙台教区復興支援全国会議・全体会で小教区の活動を発表された４名の方のうち、前回ご紹介出来なかった２名の方の発表について、今回ご紹介させていただきます。また、福島県いわき市のいわき教会チーム平・堂根から、６月に開催した復興支援住宅団地の住民の方々との「深緑の会津路　日帰りバス旅行」についてご報告いただきましたので、ご紹介いたします。

福島に共に生きる「笑顔を届けて…支えあって…」

カトリック松木教会「愛の支援グループ」　　鈴木　キミ子

福島の支援活動は、東日本大震災、人災による原発事故、そして、やがて原発をなくすこととは、福島に住んでいる私たち被災者として切り離して考えることはできないと思います。

私たちの活動は、笑顔を届け、共に歩もうというささやかな活動です。この歩みを通して「福島の厳しい現状」、「取り返しのつかない現実」と向き合いながら「未来を信じて元気になろうとしている福島（県）の人たちのこと」などを発信できるよう願い続けています。

現在も、東京教会管区の窓口となり、大勢のボランティアさんを福島に送って支援してくださっている CTVC の皆さま方、そして、お祈り、ご支援とボランティアにおいでくださっている全国の皆さま方にいつも心から感謝しています。

目に見えない被災を忘れず、日本、世界の自然、人を守るため、未来のために祈りの輪が広がることを願っています。

①活動開始の経緯

福島市民の私たち（中通り）も原発事故による放射能の被災者です。しかし、もっと大変な被災地、被災された方々に何かできることはないだろうかと祈り考え続け、震災直後から流出物写真洗浄、避難所への衣料品等の物資支援など、できることから少しずつ歩みはじめました。

②活動の変遷

松木町教会から車で 30 分ほどの福島県あづま総合体育館避難所へ教会の皆さんからの物資の支援と、炊き出し手伝いをしているうちに、数日が経った頃、避難されている方々に温かい一服の抹茶を両手に差し上げることができたら、少しは癒しのお手伝いができるのではないかと思い、心のケアとして「ふれあい茶の湯ボランティア」をスタートしました。「傾聴」も「ボランティア」も全く経験のない私たちでした。

野の花の茶花と一服の抹茶からほっこりとなさってくださり、「笑み」と「会話」が生まれていったのです。そして、2011 年８月の避難所閉鎖に伴い、仮設住宅への支援へと移っていきました。

現在も支援を継続している福島市宮代仮設住宅には、当時全く支援がなく、私たちとの出会いは、浪江町役場事務所からの紹介でした。

③現況と課題

活動の内容は、「ふれあい茶の湯」をベースとし、月２回行っています。そのうち１回は、「たのしい昼食会」。さらに、年中行事として、正月祝、初釜、ひな祭り、観桜会、花火大会観覧、夏まつり（浪江盆おどり）、敬老者祝う会、日帰り温泉、もちつき大会など。それに、今は、月々のお誕生者を祝っています。プレゼントは、Happy Birthday の歌と、その会の記念写真。それがとてもうれしそうです。今も、毎回「カリタスさん」の集まりを心待ちにしているようです。

さて、震災より５年目に入った４月、仮設住宅の自治会が解散しました。帰町が現実的に困難なこと、自分の将来のことで精いっぱいの中で負担になっていたのは確かです。自治会運営がなくなることから、元自治会役員方と相談の結果、二年続いた「ふれあいバザー」を今年は行わないことにしました。そこで、宮代仮設支援がはじまってから丸４年となる９月に、宮代仮設住民の方々の上に「希望の風」が吹くことを願って、また、県外からのボランティアさん方に感謝をこめて、「希望の風フェスティバル」をすることになっています。

また、仮設住宅を転出された方はこれまでもおられますが、10 月以降復興住宅などに移られる方も多くなると考えられます。自治会解散、転出などをふまえ、今年の３月から「カリタスからのおたより」を月初めに発行し、全戸に配っています。集まりに出てこられない方々のためにも、カリタスとの集会所での様子やお知らせ、ホットなニュースなどを取り入れ、このたよりが「ここちよい風」になれることを心がけています。

11 月以降、仮設に残っておられる方々との寄り添い方については、これまでの心のつながりを大切にしながら共に祈りながら歩む中に方法、形が見えてくると思います。

「今日も元気！きっと明日も元気！いつも笑顔でいられますように」と願いを込めて。

４年間、活動を継続中の宮代仮設住宅にて　敬老者を祝う会

カトリック原町教会の取り組み

カトリック原町教会　　高野　郁子

①活動開始の経緯

原町教会は、教会の建物には、津波の被害はなかったが実家が流された信者さん、孫の犠牲、兄弟の被害等、被害があった。また原発より２４．５ｋｍの場所にあり、水素爆発により、地域が汚染され、教会の南からいわき市の間の地域に住む信者が、東京、横浜、千葉、山形、いわき市、白河市等、大阪等遠方に避難し、すでにこちらへの帰還をあきらめ、避難地の教会に転出した方々、まだ、避難を継続する方々がいて信者が半数に減った。

２０１１年は、教会の建物の修復や、当地を巡礼においでになる教会の方々や、避難者との連絡に追われたが、たくさんのご支援をいただいた方々に感謝を述べながら、直接はお返しできないが、間接的に私たちのできることを考え、その以前から活動を開始していたＣＴＶＣ（２０１２，６，１開所）の協力を得ながら、２０１２年、７月から、津波、原発被害者が住む仮設訪問や野菜配りを始めた。（映像２、３）。

②活動の変遷

２０１２年、原町教会は、「コンコルディア」（こころを一つに）というボランティアを立ち上げ、自分たちができる範囲での活動にしぼり、ＣＴＶＣ原町ベースの協力を得て、今の活動に至っている。震災当初は、教会を含む原町区が「緊急時避難区域」と指定されたため仮設や建物の建築は許されず、車で２０分の鹿島区というところに２５カ所の仮設が設置された。現在は、その中の５カ所の仮設と交流があり、二本松の「やさい畑」から送られて来る野菜配布、全国の支援者から送られてくる布を使っての手芸活動、また教会に送られて来る支援物資関係の配布をしている。また、手芸関係のボランテイアを希望してくる他教会のとのつなぎ役もしている。それを含めて多くのボランテイア活動をＣＴＶＣ原町ベースがになっている。（映像４）多くの教会ともつながりができた。

③現況と課題

野菜配布は、一時８カ所にも拡大したが、現在は５カ所に縮小。場所によっては「福島県の野菜」は小さな子どもがいるから「いらない」という箇所があったり、仮設のドアが施錠されていて中に置くことができなかったり、仮設を借りているだけで生活感がみられなくなり、野菜を置いても腐ってしまうのではないかという懸念もでてきて、野菜の数が調整できなくなってしまったことがある。

本来の意味は、野菜配りと共に、住民とのふれあいもあったが、この頃は、住宅を建てて仮設を出る住民が増えたり、職を求めて仕事に出る住民や、小高区では、次年度の帰還の準備のために日中は小高区の自宅に戻る住民も増え、仮設が留守になっている住宅がある。

手芸活動は、現在も進行中。ただし、津波被害者の住民は、集団移転や、災害公営住宅に引っ越す住民が増え、手芸部員たちは、今は、手芸の日だけ仮設の集会場に通ってくるようになってきた。また減少傾向にある。鹿島区の津波被害者は今年度中に仮設から、災害公営住宅やかさあげされた集団移転の場所に家を新築して引っ越すのではないかと思われる。

支援物資の配布は、教会に送れられてきたものだけ、上記の関係を保っている仮設にお届けしてきた。この頃はそれも減ってきた。

浜通りに唯一のカトリックの教育をしているさゆり幼稚園は、震災前のように園児数が増えることを望んでいる。同じ敷地内に所属するものとして教会の信者も強くそれを望んでいる。

今まで、仮設住宅にすむ南相馬市民に対して行ってきたボランティア活動は来年の４月をもって、仮設の縮小や閉鎖が進めば一旦中止になると思われる。同じ仮設でも浪江の町民も入居しているところもあるので、最後の一人になるまで支援を続けたいが今はよくわからない。

しかし、仮設からそれぞれ新居に移った方々に対して何かできないかと考えることはできる。そのような場があれば、続けて支援していきたい。

仮設住宅でのやさい配り　ＣＴＶＣ、ボランティアの皆さん、原町教会メンバーにて

福島第一原発から 24.5 ㎞離れた場所に位置するカトリック原町教会には、毎週日曜日のミサに、全国各地の信者さんなど多くのお客様が訪問される。お客様とのミサ後の話し合いも、この教会に課せられた大切なミッション。原発のこと、教会のこと、信仰のこと。色々な事に話が及ぶ。

カトリック原町教会

※全体会の活動報告以外の部分につきましては、ニュースレターにてご紹介いたします。

深緑の会津路を訪ねて

いわき教会　チーム平・堂根　　佐々木　三代子

私たち「チーム平・堂根」は大震災以降、３年間、いわき市の沿岸部で津波被害を受け、ちょうど空いていた内郷雇用促進住宅に入居された被災者の方々の支援活動を続けてきました。その方々の多くは、豊間と薄磯という以前ご自分たちが住んでいた地域に建てられた復興支援住宅団地に転居されました。

内郷雇用促進住宅に入られた頃は、各方面から来られた方々の集合で、コミュニテイ形成ができていないので手伝って欲しい、とのご要望が自治会長さんからあり、「サロン」と名付けたお茶っこ傾聴と春秋の２回、イベントを行ってきました。

豊間、薄磯の復興支援住宅団地に転居なさったのち、再び、「サロン」を継続してほしいという要請があり、今年２月、再開いたしました。

それから、３月余り経た５月、一応落ち着かれたのか、サロン参加の皆さんが少しずつ、日常的な心情をもらされるようになりました。一人きりの生活の寂しさを訴える人、あるいは、老夫婦だけの生活の寂しさを語る人、新たな団地に入居したことにより、厚い壁で遮られ、両隣がどんな人か分からないとつぶやく人……。

私たちは再び原点に立ち返り、復興支援住宅団地の皆さまが、互いに協力的な親しい間柄になっていただけるような機会を作るお手伝いをしたいと思いました。

そのきっかけ作りの一つとして、また、気分転換の一助になればと、「日帰り会津バス旅行」を企画しました。さっそく、参加申し込みが相次ぎ、出発の予定が近づいてきました。

６月３日の早朝、「深緑の会津路」のバスは、薄磯、豊間の両復興支援住宅団地を出発。平・堂根のボランティアと合わせて 43 名の旅が始まりました。

最初は、リニューアルされた野口英世記念館を訪れ、英世の生い立ちから、成し遂げ羅れた業績の証しに、皆で見入ってしまいました。

会津の有名な酒蔵の前で記念撮影

鶴ヶ城では、かなりご高齢の方まで、手を取り合い、息を切らしながらも天守閣に登り詰め、目にした眺望に大満足のご様子でした。さらには、テレビで見た会津の歴史に思いを巡らし、話し合う方もいらっしゃいました。

皆さまお待ちかねの昼食は､会津の代表的な郷土料理膳（手打ちそば、こづゆ、ニシンの山椒漬け、棒鱈煮、湯葉など)。この席に、会津若松教会の舟山神父様やボランティアさんをお招きし、ご一緒に郷土料理の味を楽しみました。この中には、内郷雇用促進住宅でのイベントで、顔見知りの方々もあり、会津のボランティアの方々がにこやかに、皆さまをお迎えくださいましたことは、ありがたいことでした。

お土産など買い物を楽しむ参加者たち

午後は、「七日町ぶらり街歩き」と称して、漆器店、駄菓子やさん、木綿屋さん、酒造まで、思い思いの七日町散策を楽しみました。

各々の思いを残しながら、ここで、会津若松教会の方々とはお別れです。会津若松教会から被災者の方々へ、「喜多方ラーメンと起き上がり小法師」をお土産にいただきました。

帰路は予定外の天鐘閣（旧有栖川宮邸）に寄り、日も落ちかけた静かな一時、明治の宮様のご生活を垣間見て、目いっぱいの会津路は、木々を渡る夕風を受けて､一同バスに乗り込み、今回ご協力くださった皆さまへの感謝とともに、バスは磐越道から浜街道を豊間、薄磯へと急いだのでした。

会津若松教会から被災者の皆さまへ「喜多方ラーメンと起き上がり小法師」がプレゼントされました。手渡してくださっているのは、舟山亨神父様。

舟山神父様は、2013 年から会津若松教会の担当司祭となり、震災による被災者の方々を支援しておられましたが、去る８月１日、不慮の事故でお亡くなりになりました。どうぞ皆様、神父様のご冥福をお祈り下さい。